

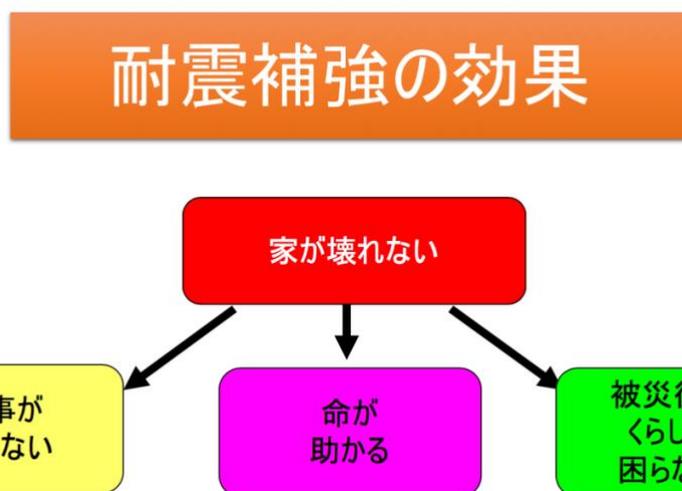


新型肺炎について思う事

世の中、新型肺炎のニュース一色ですが、2月3日付けのニュースレターでは積雪期における地震で、想定外の建物圧潰の被害が出た事例のある事をお伝えしましたが、今まさに、避難所を開設しなければならない地震が発生した場合の感染防止をどう考えるかを真剣に議論しておくべきと強く感じる次第です。

結論を言いますと、津波で家が流されたりしてしまった場合を除き、実は震災後には、できるだけ自宅で避難生活を送る事がベストなのです。それにより日本のプライバシーが保てない避難所生活や、車中泊が続く事によるエコノミッククラス症候群発生などを避ける事ができるのです。なぜ避難所生活が長期化するのかは、戻る“家”が無くなってしまったためです。親戚の家に避難しても数日ならまだしも、1ヶ月もお世話になるのは、お互いに気を使いますから、「それなら避難所に」という判断にならざるを得ないでしょう。

そのためには、今回は詳しくは述べませんが、住宅が十分な耐震性を持っている事が最も重要なのです。



M8 アルゴリズム予測 その2

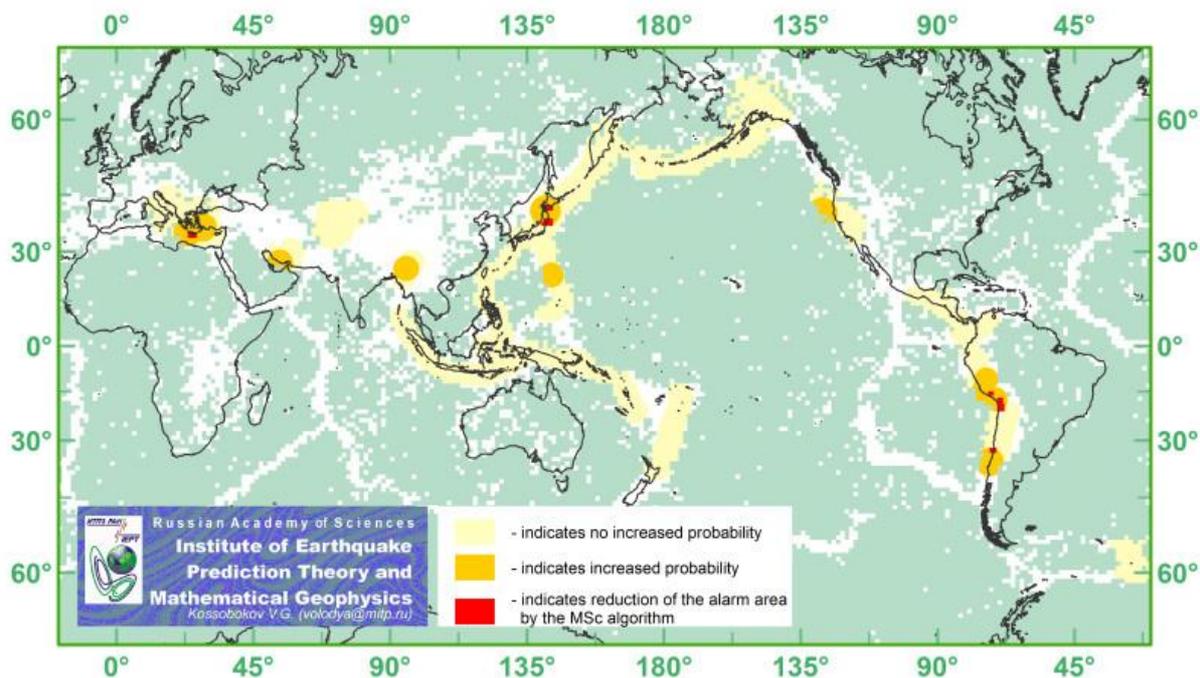
先週号で M8アルゴリズムの最新の予測をお示ししましたが、今週は同時に公開している**対象マグニチュードを7.5**とした予測です。**濃い黄色と赤の領域が現在 M8 アルゴリズムで警報が継続している地域**となります。

M8アルゴリズムでは、警報(濃い黄色の地域)は次のような地震活動を評価し、あらかじめ設定された閾値を同時に超えた場合に発令されます。

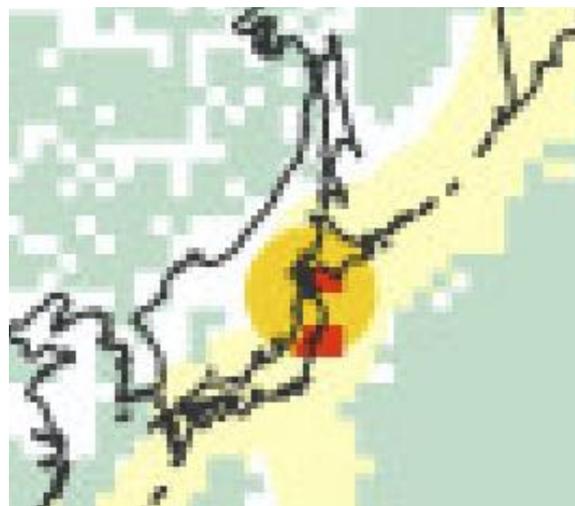
- 1) 絶対的な地震活動度
- 2) 上記地震活動度のゆらぎ
- 3) ある程度規模の大きな地震の空間的集中度
- 4) 過去1年間の主要な地震の余震活動の激しさ というものを用いています。



Regions of Increased Probability of Magnitude 7.5+ Earthquakes as on January 1, 2020 (subject to update on July 1, 2020)



次に上の図の中の日本周辺部分を拡大してみたいと思います。



図中の赤い部分は、M8アルゴリズムで異常が観察された領域の中で、さらに別のアルゴリズム(メンドシノシナリオと呼ばれる、地下天気図でも用いられている地震活動静穏化を利用したアルゴリズム)で、より可能性が高いと考えられる地域を示したものです。

M8アルゴリズムでは、予測をいつまでも出し続けるという事はありません。最初に警報を出してから、5年という期間が経過した場合には、その警報は「はずれ」として、自動的に解除されるのが大きな特徴です。

予測をいつまでも出し続ければ、それはそのうち必ず「当たる」訳ですから、予測に有効期限があるというのは、実は非常に重要な事なのです。

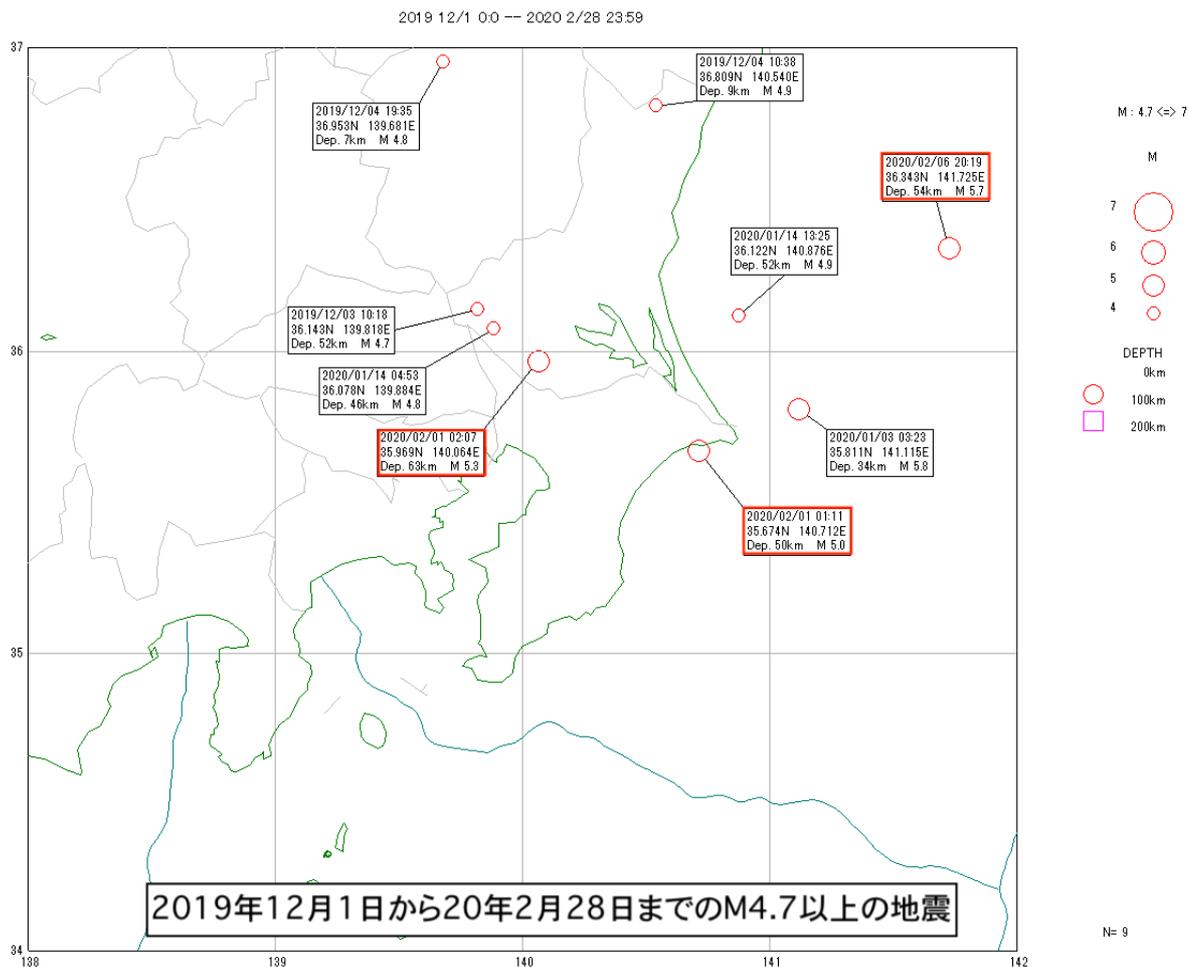


首都圏の地下天気図®

1月20日のニュースターに引き続き、2月28日時点の首都圏に特化した地下天気図です。昨年12月3日、4日に震度4を記録する地震が関東地方の異なった3つの地点(茨城県南部、茨城県北部、栃木県北部)で発生しました。それ以降も1月3日に千葉県東方沖で震度4、1月14日に茨城県南部で再び12月3日と同様の規模の地震が発生しました(M=4.8)を記録する地震が発生しました。

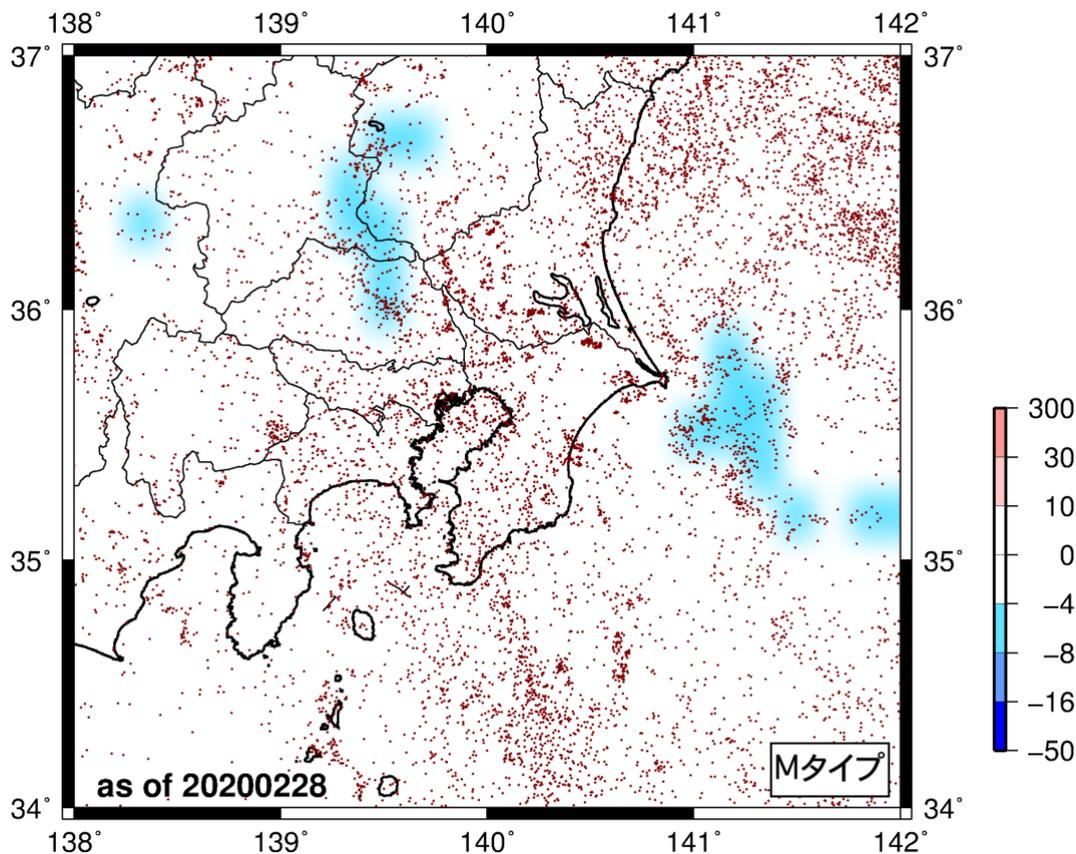
その後も2月1日未明には千葉県・銚子近傍で M5.0 の地震と茨城南部で M5.3 の地震、2月6日には茨城県沖で M5.7 の地震が発生する等、中規模の地震が続けて発生している状況です。

現在の首都圏は極めて複雑な地震活動が継続しており、評価が極めて行いづらい状況です。

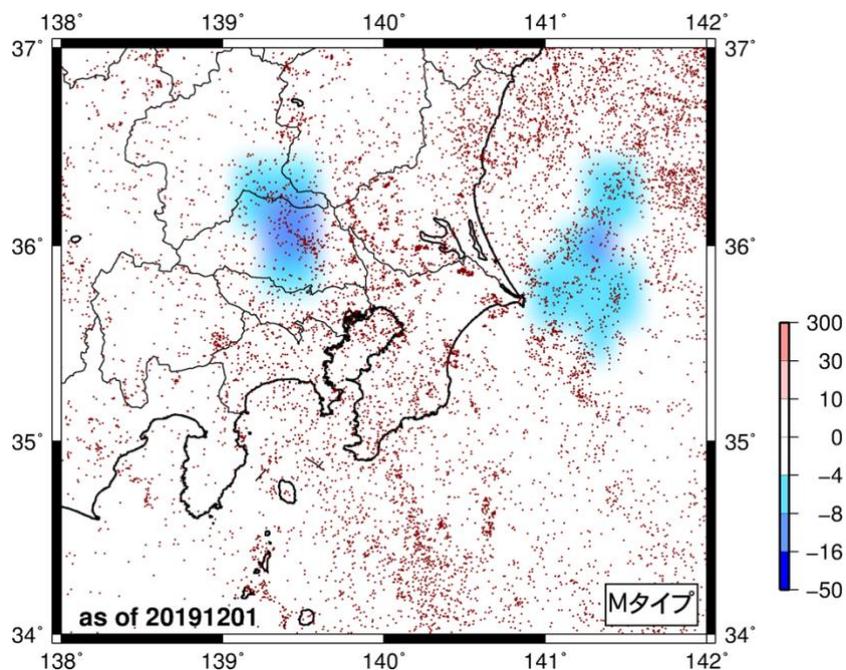




次にお示する地下天気図は、2020年2月28日時点の Mタイプ地下天気図です。



参考として昨年12月1日時点の Mタイプ地下天気図をお示します。



このところの地震活動が青い静穏化領域の中およびその周囲で発生していたのがわかります。

現在の首都圏の状況は、極めて判断がしづらい不安定な状況で、まだ埼玉県を中心に広がっている地震活動静穏化に対応する地震は発生していないのではと推察しています。